

学 位 論 文 要 旨

氏 名 谷村さくら

題 目 美術教育における陶芸学習についての研究—工程のつながりと省察に着目して—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、美術教育における陶芸学習の教育的意義について、特に工程のつながりと省察に着目して明らかにすることを目的としたものである。陶芸は、粘土に触れ、成形し、乾燥、施釉、焼成を経て完成に至る複数の工程によって成立する造形活動である。児童生徒は、粘土の柔らかさや重さ、水分量による状態変化を身体的・感覚的に捉えながら制作に取り組むとともに、焼成後には自らの意図とは異なる変化や予期しなかった結果に出会う。このような陶芸学習は、単に作品を完成させる活動にとどまらず、工程全体を見通し、完成後に制作過程を振り返ることによって、問題を発見し、原因を考え、改善を構想する学びを含んでいる。

現代社会は、デジタル化や生成 AI の発展により、情報の取得や表現、意思疎通の多くが画面上で行われる時代となっている。一方で、子供たちが実際に素材に触れ、すぐに思い通りの結果が出ない活動に向き合う経験は相対的に少なくなっている。予測困難な現代に生きる児童生徒にこそ、素材の変化や偶発性を受け止め、結果から原因を考え、次の行動を構想する学びが必要である。本研究では、陶芸学習を、粘土の材料特性に基づく触覚的・身体的経験を基盤としながら、工程のつながりを理解し、完成後の鑑賞や使用を通して制作過程を省察する学習として捉え直した。

研究方法として、まず文献調査を行い、我が国における陶芸の歴史、学校教育における陶芸学習の位置付け、教科書題材にみる陶芸学習の変遷を整理した。第 1 章では、陶芸が生活道具、産業製品、工芸品、芸術作品として時代とともに役割を変化させてきたことを明らかにした。第 2 章では、手工科から芸能科工作、戦後の図画工作・美術科に至るまでの学習指導要領や指導書を整理し、陶芸学習が生活との関わり、材料体験、工程理解、伝統文化理解などの観点から位置付けられてきたことを示した。第 3 章では、教科書に掲載された粘土・陶芸題材を分析し、時代によって器物制作、技法習得、生活に用いるものの制作、工程理解など、陶芸学習の重点が変化してきたことを明らかにした。

次に、授業実践に基づく実践調査を行った。第 4 章では、小学校第 2 学年および第 4 学年を対象に、粘土の水分量による状態変化を体験する材料体験の授業を実施した。その結果、児童は粘土の硬さ、粉状、泥状、可塑性のある状態などを触覚的に捉えながら活動し、学年によって材料への関わり方や道具操作、造形への移行に違いが見られた。これにより、陶芸学習において工程を見通して制作する前提として、材料特性を体験的に理解することの重要性が示された。

第 5 章では、小学校図画工作科における陶芸学習の授業実践を通して、児童が経験する工程の違いが、制作中および完成後の満足度、楽しさ、難しさ、改善意識にどのような影響を与えるかを検討した。成形、装飾、施釉、窯詰め、鑑賞など、児童が関わる工程の数や内容が異なる複数の実践を比較した結果、工程経験が多いほど、児童は完成作品を単なる出来栄として見るだけでなく、制作中の自らの行為と完成結果との関係を具体的に振り返る傾向が見られた。特に施釉のように、制作時には結果を予測しにくく、焼成後に大きな変化として現れる工程に関わった場合、児童は完成作品を前にして、色や質感の結果を工程に遡って捉え直し、次への改善意識を持ちやすいことが示唆された。

第 6 章では、中学校美術科における陶芸学習として、1 回目の陶芸学習における省察が 2 回目の制作に生かされるのかを比較検討した。その結果、2 回目の制作では、生徒が前回の経験を踏まえ、形や装飾だけでなく、使用目的や機能をより具体的に意識しながら制作に取り組む姿が見られた。さらに、植木鉢を制作し、実際に使用する授業実践では、完成直後には形や見た目に注目する傾向が見られた。使用することによって、機能面に対する気づきが深まったことから、陶芸学習における省察が完成後の鑑賞にとどまらず、生活の中で作品を使用する経験によってより深まることを示している。

以上の結果から、陶芸学習の教育的意義は、粘土に触れて形をつくる楽しさや完成の喜びだけでなく、複数の工程のつながりを理解し、鑑賞や使用を通して制作を省察する点にあることが明らかとなった。陶芸学習では、児童生徒が予想外の変化や思い通りにならない結果に出会い、その原因を工程に遡って考える。この経験は、問題を発見し、よりよい方法を構想する力を育む。したがって、陶芸学習は、造形的思考を促すとともに、工程のつながりと省察を通して、見通しをもって取り組む力や問題解決に向かう力を育成する学習として位置付けられ、現代社会を生きる子どもたちにとって必要な学習であると言える。